

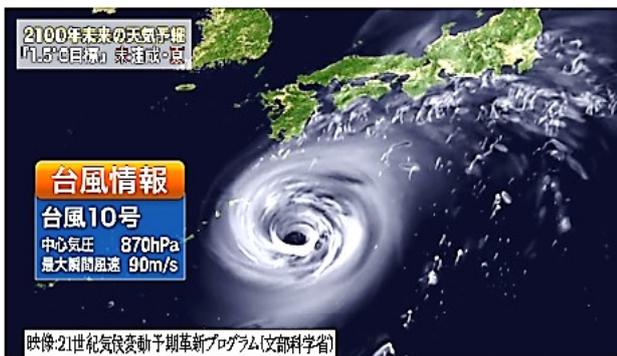


今が最後の分かれ道？

— 気候変動（気候危機）に思うこと —

設楽春樹（フォーラム運営委員）

2100年の天気予報を知っていますか



これはSF映画の一場面ではありません。環境省が科学的な裏付けに基づいて算出した公式のデータです。夏の最高気温は各地で40度を超え45度に近づき、最大瞬間風速が90m/sの猛烈な台風が上陸してきます。いずれも日本人が体験したことのない過酷な気候、もはや人間の住める限界を超えていると言ってもいいでしょう。

地球は人間の活動によって温暖化しています。すでに産業革命前と比べて平均気温は1度上昇しました。この先、この上昇を1.5度で止めるという目標（国連気候変動に関する政府間パネル『1.5度特別報告書』）を達成できなかった場合の2100年天気予報（環境省・2019年7月公開）です。この1.5度目標を達成するのは本当に至難の業だから、この天気予報が現実になるかもしれません。

「正常性バイアス」の罠

本来、心理学の用語です。危険が迫っているのに、「自分は大丈夫だ」「まだ大丈夫だ」と思って

しまう傾向のことです。過去の自然災害の時、この心理で逃げ遅れて、多数の人が命を落としました。私たちは、今日と同じような明日が来る、今年と同じような来年が来る、子どもや孫の時代も今と同じような日常があるに違いないと思ってしまふものです。だから、危機が迫っているのに行動を起こそうとしないでボーッと生きているわけです。

そんな先のこと考えられない

2100年、そんな先のことを考えている場合かという気分の人もいるかもしれませんが。格差が拡大して貧困層が増えている、巨額の借金で国や地方の財政破綻が迫っている、医療や年金などの社会保障制度も崩壊しそう。学校現場はブラックで、教職員の働き方は過労死ラインを越えている。今すでに生きることが大変なんだ。遠い先のことなんか考えている場合じゃないよ、という声が聞こえてきそうです。

でも、「高度に発達した」資本主義社会がなぜこうなったのか考えてみる必要があるでしょう。ただ、「高度に発達した資本主義」と言っても、本当は人間と自然にとっては少しも「高度」なんかではありません。「高度に発達した資本主義」を「人間と自然を大切にする原則」で厳しくコントロールすることがなければ、少しばかりの「モノ」や「便利さ」と引き換えに、大多数の人々が大きな矛盾と困難を引き受けなければならない社会になります。

だから、今の困難と将来の困難は別モノではなく、共通の**本質的な失敗**の上に成り立っているのではないかと思うのです。

グレタさんのスピーチ

では、本質的な失敗とは何か、その答えは、スウェーデンの16歳、グレタ・トゥーンベリさんが国連で各国の首脳を前にして行ったスピーチの中にあります。

「大規模な絶滅が始まろうとしているのに、話すのは、お金のことばかり、永遠の経済成長というおとぎ話ばかり。よくもそんなことができますね。」(2019・9・23、国連気候行動サミットでのスピーチ)

これはもう悲劇であり喜劇です。「卓越した知識と経験」を備えているはずの世界のリーダーたちの空疎さを、16歳の少女がいとも簡単に見破ってしまったのですから。

実際「お金のことばかり」の「お金」も実にたちが悪い。「ウィナー・テイク・オール (winner-take-all・勝者総取り)」という言葉があります。アメリカ大統領選挙の州別の投票制度を説明するのに使われる言葉ですが、今や経済の分野でも使われています。「勝った国」、「勝った企業」、「勝った個人」が富の多くを取り、多数の「負け組」は困窮して益々格差が拡大するという構造です。残念ながら、モノやカネをめぐる、どん欲な利己主義や自国中心主義が日本だけでなく世界をおおっているように見えます。

さらに人間は、自然との関係でも、「地球上の勝者＝人間」が全自然を支配し、その果実を無限に収奪する、つまり、限りない生産、限りない消費こそが限りなき進歩と幸福につながるという幻想（「永遠の経済成長というおとぎ話」）を抱き、その結果、今や地球規模での取り返しのつかない環境破壊ということになりました。

また、人間は核エネルギーを完全に支配できるという重大な勘違いもしてしまいました。

昨年5月、世界中の科学者が参加するIPBES(生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム)が報告書を公表しました。その内容は、地球に生息する800万種の生物のうち100万種が人間によって絶滅の危機にさらされているというものです。メダカだって今や絶滅危惧種です。これはもう悲劇というより狂気です。

最後の分かれ道

アメリカの海洋生物学者・レイチェルカーソンが『沈黙の春』を発表したのは1962年、彼女が問題にしたのは化学物質による環境汚染でしたが、この本の中で「私たちは、今や分かれ道にいる。…この分かれ道に行く時こそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守る、最後の唯一のチャン

スがあるといえよう」と述べています。60年近く前の記述で、もちろん彼女は今の地球温暖化の深刻さを知らなかった。しかし、地球の安全を守る最後の分かれ道だという認識は、今こそ本当にすべての人が持つべきだと思います。

ただ残念ながら、地球温暖化を完全に防ぐための分かれ道はるか昔に通過してしまいました。今残されているのは温暖化の被害をどのレベルで抑えるかという選択肢だけ。どうやって最悪の事態を防ぐかという意味での「最後の分かれ道」です。冒頭の2100年の天気予報で、今後、1.5度目標が達成されても、やはり最高気温は40度前後になり、今より強力な台風がやってくると予想されています。

「異議申し立て」をしよう

グレッタさんが一人で最初の「気候のための学校ストライキ」を行ったのは2018年8月、それが翌年の9月には世界で数百万人の若者が行動を起こすまでに広がりました。今、行動して社会を変えなければ、自分の人生の後半期に最悪の事態が待っていることに世界の敏感な若者たちは気が付き、「まあ自分の時代は何とかなるさ」と思っている「逃げ切り世代」の大人たちの社会に対して「異議申し立て」を始めたわけです。ただ日本ではこの動きが少し弱いのが心配です。日本の若者も納得できないことがあれば、社会に対して積極的に「異議申し立て」をしてほしいし、そのために学んでほしい。そして、教員たちはそういう若者たちを見守ると同時に、教員自身も「異議申し立て」をする主体として行動してほしいと思います。

※最後に一言

この気候温暖化は人為的ものではなく、過去にもあった地球の自然な気候変動の一環なのだという説があります。世界中の多くの科学者がそういう要素も踏まえながら、厳密な研究を重ねた結果、人為的な要因に対する早急な対策が必要だというのがほぼ一致した結論です。人為的でないという説は、アメリカのトランプ大統領の様な極めて無責任で危険な政治家たちに利用されています。すでに、温室効果ガス排出量世界第2位のアメリカは、パリ協定から離脱の手続きに入ってしまった。